

Title	Richard Powersの作品における危機と世界の分岐点 : still という無時間性と時制の問題
Author(s)	木原, 善彦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 5-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98082
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Richard Powers の作品における危機と世界の分岐点

——still という無時間性と時制の問題——

木原 善彦

1. はじめに

この論文では、アメリカの現代作家を代表する一人であるリチャード・パワーズ(Richard Powers)の近年の作品をいくつか取り上げながら、それらの結末近くに見られる危機的・臨界的・決定的瞬間(critical moment)において語りの時制がどのように操作されているかを整理して論じる。そしてそれによっていわば世界分岐のようなもの、あるいは宙吊りにされた時間がどう表象されているかを確認したい。

取り上げる作品は *Generosity* (2009), *Orfeo* (2014), *The Overstory* (2018), *Bewilderment* (2021) の4作品である。

2. *Orfeo* の最後で凍りつく時間

まずは *Orfeo* を見よう。小説の舞台は、2001年の同時多発テロとその直後の炭疽菌事件の余波が残る2000年代のアメリカ。主人公はDNAに音楽を組み込もうとする非常に実験的な音楽家だ。彼はそのため家に実験室を作り、サーマルサイクラーや遠心分離機やPCR装置を使って、日々細菌を培養し、実験を重ねている。ところがひょんなことから警察にそのことが知られてFBIから逃げる羽目になり、逃亡生活を続ける中で、これまでの生涯を振り返るのが大まかに言うところの小説の枠組みになっている。

主人公は最後にずっと会っていなかった愛する娘に会うが、あっという間に娘の家がFBIに包囲される。そして主人公はFBIの呼びかけに応じて外に出ていこうとする。その場面で小説が終わる。ある書評でこのエンディングは映画『明日に向かって撃て!』(1969)の結末と比べられている。ストップモーションを効果的に使用した映画史に残るあのラストシーンにたしかに雰囲気がよく似ている。

次に引用するのが小説の結末部分だ。イタリックは元からあるもので、時制に注目していただくために論者が下線を加えた。セーラ(Sarah)というのが娘、youと呼ばれているのが父親である。

She goes to the window and lifts the curtain. A cry tears out of her. *Oh, shit.* Her body retreats

from the glass and her arms fend off the fact. *Shit!* Her eyes dull and dilate. Her face goes gray. *Daddy*, she pleads. *No. Oh, please, no.*

Sara, you say. Safe though all safety's lost. *Sar? Let's make something.*

She shakes her head, sick with terror. Her eyes search yours: Make what?

Something good. Good loud. Good lively. A rose no one knows.

When she nods, even a little, you'll head to the door and through it. Run out into a place fresh and green and alert again to whole new dangers. You'll keep moving, vivace, as far as you can get, your bud vial high, like a conductor readying his baton to cue something luckier than anyone supposes. Downbeat of a little infinity. And at last you will hear how this piece goes. (*Orfeo* 375; original italics; my underlines)

ここで娘は父親に「外に出るのはやめて」と言っている。その後、二人の間でちょっと分かりにくい会話があるが、これは娘が幼い頃に親子で「何か面白いもの、面白い曲を作ろう」と言ってゲームをしていたのを数十年ぶりに繰り返しているやりとりである。この引用の前半までずっと、小説は基本的に現在形で語られてくるが、最後の段落で突然、will という助動詞が用いられている。¹

この父親は今から両手を上げて投降するので、ひょっとすると穏やかに逮捕されるのかもしれない。しかし、実験器具に見える花瓶を掲げて出ていくので、怪しいと思われて狙撃される可能性もある。*Orfeo* はこのようにして、非常にクリティカルな場面でフリーズするように終わる。未来時制が用いられているのはこの最後の一段落だけなので、これは未来を物語っているというより、やはり未来の可能性の一つが垣間見えたという印象が残る。しかもこの最終段落全体が、「もしも娘がうなずいたら」というフレーズに導かれているため、この未来はまだ宙ぶらりんのままだと言えるだろう。それゆえ、あの有名な映画のエンディングに似たストップモーションの印象が生まれるのだ。こうして死と生を分ける瞬間に、この作曲家の最後の作品が完成するという鮮烈なイメージとともに作品は閉じられる。

3. *The Overstory* で分裂する世界と “still” という可能性

では次に、リチャード・パワーズが似たような臨界的・危機的瞬間の後をもっと長く物語る例として、*The Overstory* という作品を見よう。この小説ではたくさんの登場人物がそれぞれの形で樹木と関わり、樹木を守ろうとする。そのうちの一人がパトリシア・ウェスターフォード (Patricia [Patty] Westerford) という樹木学者である。彼女は次に引用する場面で大きな国際会議に招かれ、森を守る必要性を訴える基調講演をするが、その締めくくりが少し不思議な書き方になっている。ちなみにここで出てくる *Tachigali versicolor* という学

¹ will を用いた文を「未来時制」とするのは言語学的には正しくないが、便宜上、本論ではそう呼ぶ。

名の樹木は、生涯に一度だけ花を咲かせてそれから一年足らずで枯れてしまう木で、「自殺の木」という別名があることが直前で紹介されている。

講演の最後に起きる出来事を描写するのが次の引用だ。

Plant- Patty raises her glass. She scans her speech for the last line on the last page. To Tachigali versicolor. She looks up. Three hundred brilliant people watch her, awed....

[Patty] raises her glass, and the world splits. Down one branch, she lifts the glass to her lips, toasts the room— *To Tachigali versicolor* — and drinks. Down another branch, this one, she shouts, “Here’s to unsuicide,” and flings the cup of swirling green over the gasping audience. She bumps the podium, backs away, and stumbles into the wings, leaving the room to stare at an empty stage. (*The Overstory* 466; original italics; my underlines)

パトリシアはこの直前、衆人環視の中、グラスの水に毒のようなものを入れている。そしてここで演台に置かれたグラスを高く掲げる。するとここで、世界が二つに分裂する。そして一方の世界では毒の入った水を飲んでしまうが、もう一つの世界では「反自殺に乾杯」と言って水を捨て、舞台から下がる。そしてこの自殺しない方の分岐が「この世界」と呼ばれているので、おそらく彼女が聴衆の前で命を絶つという恐ろしい形の抗議行動は実行されなかったのだろう。

ともあれ、*The Overstory* では時制が切り替えられることはない。物語は最後まで現在形で語り続けられる。*The Overstory* は地球環境の臨界点にある現在を描く小説なので、この次の段階（つまり未来時制で描かれるべき段階）はまさに今を生きる私たちの手の中にある、そこを小説にするのは困難なのかもしれない。

小説はこのあと章が改められて、「種子(Seeds)」という章に入り、まだ 30 ページほど続くが、そこにパトリシアが再登場することはないので、彼女が本当に無事かどうかは確かめようがない。しかしその 30 ページでは、何度か（正確には 21 回）印象的に still という単語が繰り返され、これが一種のキーワードとなって作品が閉じられる。

still という語が最も大きく取り上げられる場面を引用で確認しよう。

The transported pieces of downed wood snake through the standing trees. Satellites high up above this work already take pictures from orbit. The shapes turn into letters complete with tendrils flourishes, and the letters spell out a gigantic word legible from space:

STILL

The learners will puzzle over the message that springs up there, so near to the methane-belching tundra. But in the blink of a human eye, the learners will grow connections. Already, this word is greening [...]. Two centuries more, and these five living letters, too, will fade back into the swirling patterns, the changing rain and air and light. And yet— but *still* — they’ll spell out, for a

while, the word life has been saying, since the beginning. (*The Overstory* 502)

ラーナー(learner)というのはネット上に撒き散らされた超知能を持つ強力なボットで、現在の地球が抱える環境問題に対する正しい対処法を見つける可能性がある存在である。ここでは一人のアーティストがツンドラの大地で倒木を集めて、人工衛星からも読み取れるほど大きな文字で STILL という単語を綴っている。そこにはまだ決定していない時間、パトリシアが分岐させた世界でまだ定まっていない未来があり、そこにある可能性が still という単語に凝縮している。そしてそれは引用の最後で、「生命が最初のと時から言い続けている言葉」とされている。

4. *Bewilderment* に見る死と再生

次に見るのはパワーズの最新作 *Bewilderment* である。この作品はパワーズの小説には珍しく、ほぼ全編過去形で綴られている。彼の小説はここまで見たように現在形で書かれるのがデフォルトなので、こうして過去形の語りが採用されているのを見ると、語り手が未来のある時点から過去を振り返っているという一種の伏線のようなものが透けて見えてくる。

主人公の宇宙生物学者シーオ(Theo)は少し前に妻を亡くし、息子ロビン(Robin)を一人で育てている。ロビンはアスペルガー、ADHD など複数の診断名を与えられており、その症状を改善するために小説中では少し SF 的な神経療法が用いられる。次の引用では、シーオの知っている大物科学者キャリアー(Currier)がその手法を説明している。

He [Currier] described what was involved. The scanning AI would compare the patterns of connectivity inside Robin's brain— his *spontaneous brain activity*— to a prerecorded template. “Then we'll shape that spontaneous activity through visual and auditory cues. We'll start him on the composite patterns of people who have achieved high levels of composure through years of meditation. Then the AI will coax him with feedback— tell him when he's close and when he's farther away.” (*Bewilderment* 99)

要するに、さまざまな視覚や聴覚の刺激を用いて、被験者の脳波パターンを、すでに記録されたモデル脳波に近づけるということのようだ。この実験は成功する。そして今は亡き母の脳波をモデルに使うと事態はめざましく改善するが、同時にロビンの言動が母親に似てくるので、父親シーオは不安になる。

ロビンは母親と同様に地球環境を大いに憂えて、自分でも何かできることがないかと探る。ところが、ワシントン DC の連邦議会議事堂脇で横断幕を掲げたことがきっかけで父親が一時身柄を拘束され、先ほどの実験的神経療法の予算も打ち切られて、ロビンの精神状態は極限まで落ち込み、最後にロビンは環境を守ろうとする必死な努力の中で無茶な行動

を起こし、その結果、死んでしまう。

そして父シーオがロビンの死にショックを受け、立ち直れずにいるところにキャリアから連絡が入るのが次の引用の場面である。ここでは再び時制に注目するため、数箇所の下線を施した。

People brought food. The less I ate, the more they brought. I couldn't bring myself to pay a bill or cut the grass or wash a dish or watch the news....

I didn't answer my phone. Now and then I skimmed voice mails and glanced at texts. Nothing needed answering. I wouldn't have had answers, anyway.

Then one day, a message from Currier. *If you'd like to be with Robbie, you can be.*
(*Bewilderment* 276)

ここでページが改められる。この小説は章に区切られてはいないが、数ページごとに話が短く区切れている。そして次のページは次の引用のように始まる。そしてそのすぐ後にその次の引用が続く。

“OKAY,” SAYS THE MAN I NO LONGER HATE. “Relax and hold still. Watch the dot in the middle of the screen. Now let the dot move to the right.”

I don't know how. He says it's the easiest thing in the world. Wait until it starts to move itself. Then stay in that state of mind. (*Bewilderment* 277)

AND THEN ONE DAY, MY SON IS THERE, inside my head as sure as life. My wife, too, still inside him. What they felt, then, I now feel. Which is bigger, outer space or inner?
(*Bewilderment* 278)

こうしてシーオは息子と同じ実験を行い、脳波を共鳴させることで死んだ息子との再会を果たすことになるが、ここで時制が現在形に変わったことに注目しておこう。先に論じたようにこの作品はパワーズには珍しく、ずっと過去形で語られていた。それはいわば息子が死んだ時点から過去を振り返っていたということになる。そして同時に、シーオの「今」が現在形で語られていることも意味する。

ついでに言えば、この小説のところどころに挟まっている太陽系外惑星訪問物語の問題もある。それらは一応、息子が眠る前に父親が聞かせている寝物語として読むこともできるが、単なるお話として片付けるにはやや臨場感が過剰である、換言するなら、二人でその惑星を探検しているように書かれていることを考えると、死後の息子と父親がシミュレーション空間の中で一緒に宇宙へ旅しているという解釈をすることも十分に可能だ。

いずれにせよ、ここでもやはり一人の人の死が時制を分け、世界を分けている。いや、

ここでロビンがある意味よみがえっていることも重要なので、死と再生という一つのセクトが時制を区切る両義的な境界、時制を切り替えるスイッチになっていると理解すべきだろう。*Orfeo* でも、主人公が FBI と対峙する瞬間が実験音楽の完成を意味することになっているし、*The Overstory* でも、パトリシアの講演を契機として地球が再生するための「種子」がまかれていると言える。

5. *Generosity* における死と再生、あるいは書き直し

では最後に、*Generosity* を見ていくことにしたい。この小説は先ほどまでに取り上げた3作と比べると少し語り方が入り組んでいる。この作品はある理由で小説を書けなくなった男が主人公で、彼は夜間の大学に非常勤でクリエイティブ・ライティングを教えに行くことになる。そして教室で、いつも幸福そうな留学生タッサ(Tassa)と会うが、タッサは幸福の遺伝子の持ち主としてメディアに取り上げられて追い回され、トラブルにも巻き込まれ、しまいには普通の暮らしができなくなってしまう。

この小説は全5章から成るが、4章まではほぼずっと現在形で書かれている。ところが第5章はいきなり未来形で書かれている。次がその場面である。

She'll rise early, before the sun, and for a moment won't know where she is. She won't even be sure of *who*. Then the hotel room, her notebook, her computer, the view of a mountain town from a window in western Tunisia, and Tonia Schiff rematerializes. (*Generosity* 243)

さらにもう一つ、その続きから引用する。

She'll look up from the page [...]. And there, working toward her down the sloping street, still two hundred meters away, will be the leisurely, reconciled, unmistakable silhouette of the figure she has come halfway around the world to learn from. (*Generosity* 246-247)

トニア・シフ(Tonia Schiff)というのは雑誌記者である。しかし、場所はなぜかチュニジアになっている。そして彼女の目の前に見覚えのある人影が現れる。これは誰か？ これはいつの話か？ そしてこの小説の現在と未来の境目にはどのような出来事があったのか？ いろいろ疑問が湧くが、ここで話は区切れて、別の話が始まる。

第5章はこの後、また現在の語りに戻って、さらに追い込まれていくタッサを描いていく。主人公はタッサを連れてカナダへ逃げようとするが、国境の手前で次の悲劇が起きる。次の引用がその場面だ。

He [...] heads into the bathroom. His Dopp kit sits by the side of the sink, wide open. He steps on a small, hard nub: a pill lodges in the sole of his foot. He looks down and sees three others on the

floor. One more on the sink counter, next to the open empty containers. Robert's Ativan. Russell's doxylamine. Old Darvons from a wisdom-tooth extraction he was saving for a rainy day. Every remedy his kit has to offer.

He slams back into the other room and crouches at her bedside. He grasps her shoulder and shakes, first briskly, then with real force. She's pliant, but makes no motion of her own. He shouts at her; the rage comes so easily. Her face stays composed, beatific. He tries to stand her upright and walk her on his arm. She will not stiffen into life. (*Generosity* 286)

タッサはここで主人公ラッセル(Russell)が持っていた薬をすべて飲み、自殺を図ったのである。この後、瀕死の彼女はヘリコプターで病院へと運ばれていく。そしてまたそこで話が区切れて、別の話が始まる。それが次の引用だ。

The figure strolls down the hill, growing. But for a long time, Tonia Schiff will be unable to tell anything. Mood, health, mental state: impossible to determine. Not until the figure reaches the café will Tonia even be sure it's Thassadit Amzwar.

Greatly changed, of course. (*Generosity* 288)

ここではやや時制が揺れているが、基本的には先の引用の続きであることは明らかだ。他のところに書かれた情報から判断すると、これは 2 年後のことらしい。結局、何がどうなっているのかを整理すると、「タッサはカナダ国境近くで自殺を図るが、命を取り留め、自分の国に戻って生活している。そしてトニア・シフがそんな彼女を取材しに行く」ということのようにだ。ハッピーエンドではないけれども、最悪ではない結末だった、という終わり方にも見える。

しかし果たしてそうなのだろうか。トニアとタッサとが会うこの場面には、未来時制以外にもいろいろと不自然・不可思議な要素がちりばめられている。

次の引用を見てほしい。

She [Schiff] reaches in and pulls out the digital-video camera.

The Amzwar smile breaks free, matching North Africa's noon. "Oh, Miss Schiff! You know that's not possible anymore." She's in no way reluctant. In fact, her face is willing, if only film could still record her. (290)

トニアがビデオを撮ろうとすると、タッサは「それはもう不可能だ」と答えている。これは「ビデオはもう勘弁してください」と言っているだけなのか。それに加えて地の文にも、「いまだにフィルムが彼女を記録に収めることができるのなら」と書かれているのは不思議だ。

もう一つ引用を見よう。

She [Schiff] hands them[two small books] across to the apparition, a last temptation from life and the living. (292)

ここでタッサは apparition 「幽霊・亡霊」と呼ばれている。これはなぜなのか。「生と生者からの最後の誘惑」と言って二冊の本を手渡しているのも奇妙だ。

これらの謎を説明する解釈で十分な説得力を持つ読み方が一つある。実はタッサはあのまま死んだ（すなわち自殺は未遂に終わらなかった）のであり、付け足しのように未来形で書かれているこの部分は語り手の妄想・空想・希望に過ぎないという可能性だ。

しかしさらにここからもう一つひねりがある。小説の中ではこの後、この場面から次々にいろいろなものが消えていく。それが次の引用だ。消えていくものに下線を施した。

She slips the book back across the space between them. But just as Schiff takes it, the text disappears. Neither woman, I guess, will even flinch. The next to vanish off the table will be the camera, leaving only their two half-finished teas, a condiments rack, and a menu.

As the two look on, the menu's French fades. The Arabic follows it into white. So, too, do the sounds from the air around the café, until the only language running through the nearby streets is the one that existed in these parts long before the arrival of writing. (292-293)

もう一つ引用を見よう。ここも注目すべき箇所に下線を施した。

And I'm here again, across from the daughter of happiness as I never will be again, in anything but story. The two of us sit sampling the afternoon's slow changes, this sun under which there can be nothing new. She's still alive, my invented friend, just as I conceived her, still uncrushed by the collective need for happier endings. All writing is rewriting. (293)

下線部にある「幸福の娘と向き合う状況は、物語の中以外ではもう二度と起こらない」とはどういうことか？ 「彼女はここではまだ生きている」というのは、もちろん「やはり現実世界で彼女は死んでいる」ということを意味している可能性もあるが、タッサを my invented friend と呼んでいるということは、彼女が実は虚構の存在だと語り手も知っていることを意味するはずだ。

それゆえ、ここに書かれているように「書くことは常に書き直すこと」になる。これが本論考の結論でもある。少なくともこの 4 作品において、書くことはいつも死の記録になるのだが、同時に、どの作品でもその結末で書き直す可能性が示唆されていて、それが時制の切り替えで表現されているということである。

先ほどの引用では、still という語の反復も印象的だ。この語は生態系の危機を訴えるキーワードとして *The Overstory* の終盤で重要な役割を果たす語でもある。つまりパワーズの小説の中核にあるのは「まだ書き直せる」というまさにクリティカルな瞬間、still としか呼びようのない時間であり、そこではやはり「物語を書く、書き直す」ことが重要になるということなのだ。

小説の最後は次の引用のように締めくくられている。

And for a little while, before this small shared joy, too, disappears back into fact, we sit and watch the Atlas go dark. (293)

最後に「アトラス山脈が闇の中に消えていく」とある。これは普通に読めばアトラス山脈なのだが、ひょっとすると地図帳の方のアトラス(atlas)なのかもしれない。これは考えすぎかもしれないが、この描写の下敷きにあるのはホルヘ・ルイス・ボルヘスの短編「学問の厳密さについて」なのではないか。あの短編では原寸大の地図が最後にぼろぼろになっていく光景が印象的だが、ここでもあらゆる文字が消えていく。これは黙示録的な闇の到来を意味しているわけではなく、常に書き直しが可能な still という無時間的な白紙を象徴しているのではないだろうか。

6. 終わりに

一つの論文中で 4 つもの作品を取り上げたためにやや散漫な論になったかもしれない。要するにポイントは、①パワーズはこれらの作品でしばしば、結末近くの重要なターニングポイント（あるいは世界の分岐点）において時制を操作しているということ、②そしてそこに必ず死と再生が関わっているということ（それが人間であれ、地球であれ）、③さらにその再生というところでは作家による書き直し・語り直しが重要になる。この 3 点である。

最後に一つ余談になるが、2024 年 9 月下旬にパワーズの新作 *Playground* の刊行が予定されており、そこでも死者の復活ということに関してここで論じた法則ないしはパターンが非常に印象的な形で、どんでん返しの用いられている。これも本論を裏付けるものと考えたい。

（本論文は、2024 年 5 月 5 日に東北大学で開催された日本英文学会全国大会のシンポジウム「危機の時代と批評」における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。）

引用文献

Richard Powers. *Generosity: An Enhancement*. Farrar, Straus and Giroux, 2009.

---. *Orfeo*. W. W. Norton, 2014.

---. *The Overstory*. W. W. Norton, 2018.

---. *Bewilderment*. W. W. Norton, 2021.